2023年度　一般入学試験　前期日程（2月2日）

国　　語

（試験時間　60分）

注　意　事　項

1　**試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。**

2　この問題冊子は，29ページあります。

3　試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を挙げて監督者に知らせなさい。

4　**解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので，それぞれ正しく記入し，マークしなさい。**

①　**試験コード欄・座席番号欄**

試験コード・座席番号(数字)を**記入**し，さらにその下のマーク欄に**マーク**しなさい。**正しくマークされていない場合は，採点できないことがあります。**

②　**氏名欄**

氏名・フリガナを**記入**しなさい。

5　解答は，解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば，**10** と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の(例)のように**解答番号10**の**解答欄**の③に**マーク**しなさい。

（例）

解答番号	解　答　欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

6　問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけません。

7　試験終了後，問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問

次の文章は、一九二七年に発表されたドイツの哲学者ハイデガー（一八八九―一九七六）の主著『存在と時間』について論じたものである。これを読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

1 私たちの生きる現代社会においては、人々がどの性別の人間なのかということが極めて大きな意味を持っている。人は、生まれたその瞬間から、女性・男性どちらかの性別を割り当てられ、割り当てられた性別に相応（ふさわ）しい行動様式や思考様式を身に着けるよう、周囲に要求され続ける。世の中の服飾は「男性用」と「女性用」に分かれているのであり、それ以外の身体的特徴、【 a 】耳の大きさや腕の長さによっては、現在「男性用／女性用」が分かれているほどの厳しい服飾の分類はなされていない。保育園や小学校の時点から、子どもたちは男女で異なる取り扱いを受け、そうした差異化の根拠はしばしばフトウメイ(イ)である。会社でも学校でも、人々は男性と女性のどちらかであるとされ、性別に応じて異なるコミュニケーション様式や、人間関係の形成が求められる。【 b 】女性であることによって責任ある立場に立つことを許されなかったり、他者にホウシ(ロ)する仕事ばかりが割り振られたりする、そのような現状が存在しているが、とはいえそうした性差別が問われる時ですら、往々にして人々が女性と男性のどちらかの性別を生きているという前提は揺らぐことがないものとして想定されている。

2 私たちの社会では、人々は単に「女性として／男性として」他者から扱われるというだけでなく、実際に人々は、女性としての自分や男性としての自分を生きてもいる。女性として女性とコミュニケーションをし、男性として女性とデートし、男性として男性を好きになり、女性として女性にアドバイスする。(A)このように、ジェンダー（性別）はもはや人々にとってのアイデンティティの一部を構成してすらいる。

3 しかし、生まれたばかりの赤ん坊は、そのような性にかかわるアイデンティティをもっていない。赤ん坊は確かにいくらかの身体的特徴をすでに備え、そのうちいくつかの特徴をピックアップすることで赤ん坊たちを複数のグループに分けることは、確かにできるかもしれない。【 c 】、赤ん坊は男性を生きていたり、女性を生きていたりしない。生まれたばかりの子どもには、ジェンダー（性別）のアイデンティティが存在していないからである。

4 以上の現実を反省するなら、誕生の時点ではもっていなかった自分の性別のアイデンティティを、私たちは次第に生きられるようになっていった（そのように育っていった）、と主張することには十分な根拠があるように思われる。物心つく以前から「女の子用の」衣服や玩具を与えられ、学校で繰り返し「男性ではなく女性」として扱われ、同性の友人と異性の友人とでコミュニケーションの在りかたを峻別するよう要求される。そうした経験を通じて、私たちは自らの性別を自分自身のものとしていく。そうして私たちは、たとえ無意識的にであれ、男女どちらかの性別をもつものとして自己を認識し、そうした自己の在りようへと自らをコミットさせていくようになる。そして実際のところ、そうしたコミットメントは、様々な行為を導く役割を果たしている。男性社員と女性社員で対応を変え、ショッピングモールで女性用の服飾が売られているフロアへと自然に足を延ばすとき、私たちは確かに、女性である自己へと自らをコミットさせている。家具職人がハンマーを振るうときすでに家具職人であったように、異性や同性に同性や異性として話しかけ、レディースやメンズのフロアに向かってエスカレーターを昇るまさにそのとき、私たちは女性である／あるいは男性である。

5 私たちがこうして「女性」や「男性」であることができるようになるにあたって、明示的な選択が必要とされることはふつうない。既にして男女の区別が極めて大きな意味を持っている、そうした世界に生まれ、そのうちの一つの性別を割り当てられ、命じられた通りに「世界に没入」[注1]するだけで、私たちはジェンダー（性別）にかかわるアイデンティティを獲得していく。およそ人々はどのように生きるのがふつうなのかという、〈ひと〉としての生き方を前提として意味を与えられた世界へと「没入」することを通じて、私たちは〈ひと〉であることができるようになっていくのである。

6 (B) 私たちは、はじめから〈ひと〉が生きるためにデザインされた世界へと、「没入」する。そのことによって、私たちは他の人々と同じような生き方に重要性を見出し、他の人々と同じような／同じようにアイデンティティを形成されていく。そうして形作られていった〈ひと〉としての自己は、とはいえ「私」の外部にある支配者ではない。私たち自身が〈ひと〉なのであり、〈ひと〉であることができるようになることが、実際のところ私たちが社会の中で自然に行為者となっていくプロセスの一部を占めてい

るのである。

7 ハイデガーは、以上の次第をまた次のようにも説明している。

8 平均的な在りかたは、〈ひと〉の実存論的な性格である。〈ひと〉にとっては、その存在において、本質的にその平均的な在りかたが問題なのである。（『存在と時間』（127）[注2]）

9 私たちは、おのおの自ら自身の存在が「問題である」ような、そういった存在者である。そして、その「問題である」自己の在りようは、日常的には他の人々と同じような平均的な内容を持っている。人間の命を特別に重んじることで動物の声を無視し、男女どちらかの性別を生き、一人前の労働者であり、異性を好きになり、といった「人としてふつうの生き方」へと、自然とコミットしていく。そうしてそのように生きることが「できる」ようになってきた私たちは、そのようなコミットメントに導かれる仕方で、日々の行為を積み重ねていく。ここには、ある種の「没入」の循環が存在する。日々の生活に「没入」することによって、私たちは人々と同じ在りかたへと「没入」していくが、そのことによってますます、私たちは目の前の現実を他の仕方で見ることができなくなっていく。「没入」が「没入」を呼び、さらにそれが「没入」の永続化を助けるという循環が、ここには働いているのである。

10 もちろん、社会のすべての人が同じように〈ひと〉になることができるわけではない。人は異性を愛するものだという規範に従うことのない人々や、自らを男性としても女性としても認識できない／しない人々、また自らに割り当てられた性別とは異なる性別においてはっきり自己のアイデンティティを形成されている人々もいる。成人前後で一人前の労働者になり、資本主義社会において自己自身を経済的に養うのが当然だとされていても、そのようには生きない／生きられない人々は存在しており、そもそも社会の中に根強く存在する性差別、障害者差別、民族差別、部落差別等々により、あらかじめ労働市場から部分的に、もしくは全面的に締め出されている人々もいる。それゆえ、私たちはみな日常的に〈ひと〉なのだ、というハイデガーの主張は、

そのままではあまりにも社会のマジョリティの目線に寄り添い過ぎているように見える。

11 (C)そうした懸念は、極めて重要な視点である。しかし、ここでは、むしろそうした人々の置かれた差別や抑圧の状況を説明する概念こそが〈ひと〉である、という解釈の展開を示すこともしておきたい。

12 ハイデガーが共同存在論(注3)のボウトウ(ハ)から繰り返し強調するのは、〈ひと〉としての規範的な在りかたが空気のように共有されていることによって、〈ひと〉として存在しないもの・存在できないものに対する絶えざる矯正（ただそうとすること）の圧力がかかっているということである。実際、ハイデガーは〈ひと〉の在りようを端的に表現する「公共的な在りかた」について、それは三つの要素で成立すると述べるが（『存在と時間』（127））、それら「隔たっている在りかた」(ニ)、「均一化」、「平均的な在りかた」の三つはいずれも、〈ひと〉がそうするようにはしない人々のあいだに存在する差異をケンチ(ウ)し、同一化しようと試み、多くの人々と同じように生きることを強いる、そうした規範的圧力を内包している。もし、私たち全ての人間が、ある社会に生まれることでまったく自然に〈ひと〉になっているのだとしたら、(D)そのような圧力はほんらい必要がないだろう。そのとき、私たちが〈ひと〉であることは文字通りの意味で事実となる。しかしハイデガーは、そうは考えていない。私たちが〈ひと〉であるというハイデガーの主張は、事実ではなく規範を指したものであり、私たちは〈ひと〉と同じように生きるべきだという〈ひと〉の圧力に否応なく曝されているという意味で、皆〈ひと〉なのである。そして繰り返すが、〈ひと〉がそうした規範性を予め内包しているのは、〈ひと〉と異なる生き方をする／せざるを得ない人々が現に存在しているからである。

13 ハイデガーによれば、「公共性が、さしあたり全ての世界解釈と現存在解釈とを規制し、全てにおいて正当性を握っている」（『存在と時間』（127））。世界に何が存在するかについての理解や解釈、あるいは自分たち自身が誰であるのかについての理解や解釈には、不一致があり得る。だからこそ、〈ひと〉は「これが正当なのだ」と主張し続けなければならない。〈ひと〉が決めているのは、人々が実際にどのようにあるかという事実ではなく、「世界内存在の、課題や規則、尺度や切実さ、そして射程距離など」（『存在と時間』（268））であり、それはつねに規範でありルールである。どのような生き方が「当たり前」であり、どのような生き方は「逸脱している」か。そのような尺度や許容範囲が、社会のなかではうっすらと共有されており、そのルールを逸脱する

者、そのルールに敢えて従わない者にはサンクション[注4]が下るように社会はできている。そのサンクションは例えば、異性愛を性的指向としない人々への制度的差別や、トランスジェンダーの就労からの排除やアイデンティティの否定、また肉を食べないベジタリアンやヴィーガンに対する誹謗チュウショウ[ホ]という形をとる。

14 もちろん、全ての面でマジョリティである〈ひと〉も、全ての面でマイノリティである人も、存在していない。ヴィーガンとして家族や会社の同僚から冷ややかな視線を受けることのある人が、自民族の優位を強固に主張するレイシストであることはあり得るし、生まれたときに割り振られた性別とは異なる性別を生きているトランスジェンダーの人が、同性愛者の存在を忌避し、差別的な暴言を吐くこともあるかもしれない。

15 すでに世の中にある存在者たち、そしてそれらの意味を支え続ける社会制度や法律が、そもそも〈ひと〉としての生き方を想定してデザインされている以上、何気なく「世界に没入」し、日々の生活を営んでいくだけで、私たちは〈ひと〉であることができるようになる。だからこそ、何らかの避けがたい選択や、あるいは倫理的・宗教的理由に基づいてそうした社会の規範的な常識から部分的に離れた生き方をしている人であっても、他の様々な面では〈ひと〉と同じように考え、他の［X］に対する抑圧に加担することがある。

16 こうして、私たちは「現存在は日常的には〈ひと〉である」とするハイデガーの主張にふたたび立ち返ることとなる。確かに、あらゆる面で［Y］であるような人々は少ない。何らかの仕方で〈ひと〉になることができず、不当な扱いを受けることになる人々や、〈ひと〉になるために他の人々とは異なる次元の努力が要求され続ける人々は、確かに存在する。「世界への親しみ」を感じられず、世界全体が場合によってはいつもよそよそしく感じられざるを得ない人々は存在する。しかし、そうした人々の苦難や抑圧の経験は、〈ひと〉の外部にいるという理由でもたらされているのではない。それはまさに〈ひと〉になるべしという規範の内部にいるからこそもたらされるのである。だからこそ、その人はある面では〈ひと〉とは異なる［Z］としての経験を強いられつつも、他の面では〈ひと〉として他の人々に対する抑圧や差別に加担する側に回ることがあるのである。

17 他者たちと同じ社会に暮らす私たちの日常は、このようにできている。誰も〈ひと〉から逃れることはできないし、人々は自

然と〈ひと〉であることができるようになっていく。

18 最後に改めて、共同存在論の結論を繰り返しておこう。

19 日常的な現存在とは〈誰か〉という問いには、それは〈ひと〉であると答えられる。〈ひと〉はだれでもない者であり、共同相互存在において、全ての現存在はそのつどすでにこのだれでもない者へと引きわたされている。（『存在と時間』（128））

20 私たちは他者と共にある。他者たちとともにある世界に生まれ、他者たちとともに同じような生き方を自然に身に着けていく。そのことだけで、私たちは〈ひと〉になるのである。

（高井ゆと里の文章による。ただし、一部変更した。）

（注）1 没入 … ハイデガーによるAufgehenの訳語。通常とは少し異なった意味合いで用いられている。

2 （127） … これ以降、本文中の『存在と時間』引用部に示されている丸かっこ付き数字は、二〇〇六年にドイツのマックス・ニーマイヤー社より刊行された単行本におけるページ数を表している。なお、日本語訳は筆者による。

3 共同存在論 … 『存在と時間』第二十五節～二十八節の表題である「共同存在として、また自己存在としての世界内存在：〈ひと〉」の略称。

4 サンクション … 心理的・物理的圧力。社会的制裁のこと。

問1　空欄【 a 】～【 c 】に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は 1 ～ 3 。

a 1
① あるいは　② 言うなれば　③ そして　④ たとえば　⑤ もしくは

b 2
① このように　② とはいえ　③ それとも　④ では　⑤ なかでも

c 3
① しかし　② しかも　③ したがって　④ たしかに　⑤ なぜならば

問2 破線部**ア**「往々にして」・**イ**「峻別する」・**ウ**「端的に」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 4 ～ 6 。

ア「往々にして」 4

① 暗黙のうちに
② 結局のところ
③ ごくまれに
④ かなりの頻度で
⑤ 何度も繰り返されて

イ「峻別する」 5

① あやふやなままにする
② 無意識に判断する
③ はっきりと分ける
④ あれこれ思い悩む
⑤ 明確な基準を定める

ウ「端的に」 6

① 言葉を尽くして丁寧に
② 要点を捉えてはっきりと
③ 一方の立場に偏って
④ 間接的にほのめかして
⑤ 不十分で中途半端に

問3 波線部(A)「このように、ジェンダー（性別）はもはや人々にとってのアイデンティティの一部を構成してすらいる」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は $\boxed{7}$ 。

① 人間は生まれながらに身体的な性別を有しているが、社会からその性別らしくあるように求められることによって、性別が自分という人間を形作る重要な要素となっていくということ。

② 人間には、生まれもった身体的な性別とは別に社会によって与えられる性別があるが、その両者が一致して初めて、人はその人らしく振る舞うことができるようになるということ。

③ 社会が要請する、人間は生まれながらの性別に従って成長すべきだ、という根拠のない思い込みによって、気づかないうちに自分自身の生き方を限定してしまっているということ。

④ 人間は、生まれついた性別にあった行動や思考を周囲から強制されるが、後天的に得たそのような振る舞いこそが、自分がどの性別の人間なのかを判断する基準になるということ。

⑤ 身体的な性別とは違って、社会的な性別はその個人に属するものではないが、気づかないうちにその行動や思考の規範となって、周りの人々にもそう扱うことを要求するということ。

問4　波線部(B)「私たちは、はじめから〈ひと〉が生きるためにデザインされた世界へと、『没入』する」とあるが、ここでの「〈ひと〉」とはどのような意味であるか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **8** 。

① 種としての人類全体
② 自分自身を除いた他人
③ 特定の個人ではない誰か
④ 社会生活を行う自立した大人
⑤ 社会における平均的な人間一般

問5 波線部Ⓒ「そうした懸念」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **9** 。

① ハイデガーの考えに沿った、自己の在りようは他の人々と同じような平均的な内容を持つという意見が、いわゆるふつうの〈ひと〉からはみ出した人々を除外しているのではないかということ。

② 日々の行為を積み重ね日々の生活に「没入」することによって私たちは平均的な自己を獲得していくというハイデガーの持論は、平均的ではない人々への差別を助長するのではないかということ。

③ ハイデガーは、女性と男性とは生まれながらに厳格に区別されているととらえていたが、これは現代の多様な性別の在りかたに対して、あまりに未熟な見識だったといわざるをえないということ。

④ ハイデガーの共同存在論では、「〈ひと〉としての規範的な在りかた」を逸脱しないことが重要だと述べられているが、そのような考え方はこの背景にある本質的な問題を覆い隠してしまいかねないということ。

⑤ ハイデガーによる「〈ひと〉にとっては、その存在において、本質的にその平均的な在りかたが問題」だという説明は、一方の立場からの言及であって、論としてバランスが取れていないのではないかということ。

問6 波線部(D)「そのような圧力」とあるが、その具体例として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **10** 。

① 赤信号を無視した子どもが、交通ルールを守るように保護者に厳しく叱られる。
② 生まれつき明るい髪色をしていた中学生が、教師から黒く染めるように指導される。
③ スーパーで万引きが見つかった人物が、別室に連れて行かれた後に警察へ通報される。
④ 優先席に座った義足の人物が、障害に気づかなかった老人から席を立つよう非難される。
⑤ ギャンブルに依存し借金を繰り返していた人物が、両親にカウンセリングを受けさせられる。

問7 空欄 X ～ Z に入れる語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑥の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 11 。

① X＝マジョリティ　Y＝マジョリティ　Z＝マイノリティ
② X＝マジョリティ　Y＝マイノリティ　Z＝マジョリティ
③ X＝マジョリティ　Y＝マイノリティ　Z＝マイノリティ
④ X＝マイノリティ　Y＝マジョリティ　Z＝マジョリティ
⑤ X＝マイノリティ　Y＝マジョリティ　Z＝マイノリティ
⑥ X＝マイノリティ　Y＝マイノリティ　Z＝マジョリティ

問8 次の一文は、本文中のいずれかの**段落の終わり**に入るべきものである。この一文が入る段落として最も適切なものを、後の①～⑥の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 12 。

ここでも重要なのは、〈ひと〉になるよう私たちを仕向ける社会の力学からは、誰も自由になれないということである。

① 第6段落
② 第9段落
③ 第11段落
④ 第13段落
⑤ 第14段落
⑥ 第17段落

問9 本文の構成についての説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **13** 。

① この文章は、ハイデガーの『存在と時間』の内容をかみ砕いて説明したもので、周囲の環境からの抑圧によって形作られるジェンダーと、生まれながらの規範であるアイデンティティとの違いについて対比しながら述べている。

② この文章は、ハイデガーの『存在と時間』における〈ひと〉という概念が示すものを特定しようとしたもので、私たちは常に〈ひと〉であるとも言えるし、場合によってはそうでないとも言えるといった包括的な結論を導いている。

③ この文章は、ハイデガーの共同存在論について分析したもので、前半ではジェンダーを例に、後半では社会規範と個人との関係から、私たちが〈ひと〉になっていくということについて解説している。

④ この文章は、ハイデガーの共同存在論の「〈ひと〉としての規範的な在りかたが共有されることで〈ひと〉は〈ひと〉になっていく」という主張を主軸にして、自己こそが他者を生み出す存在であるという解釈を提示している。

⑤ この文章は、難解だと言われてきたハイデガー哲学の基本概念について、一見哲学とは無関係である日常の卑近な現象にたとえて論じることで、一般的な読者にも理解しやすいような説明をすることに成功している。

問10 二重傍線部(イ)〜(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 14 〜 18 。

(イ) フトウメイ 14

① 新しい生活様式がシントウする
② 貨物を船にトウサイする
③ 銀行口座がトウケツされる
④ 故人へのアイトウの意を表す
⑤ 前例をトウシュウする

(ロ) ホウシ 15

① 他者のモホウに徹する
② ホウビの品を与える
③ ホウマン経営を告発する
④ 絵馬をホウノウする
⑤ 新年のホウフを語る

(ハ) ボウトウ 16

① ボウリャクをめぐらせる
② タイボウ生活を強いられる
③ ボウケンの旅に出る
④ 街の風景がヘンボウする
⑤ ボウガイの喜びにひたる

(ニ) ケンチ

17

① ケンシン的に振る舞う
② 犯罪のケンギがかかる
③ ケンメイな判断を下す
④ 入念にケントウする
⑤ ケンキュウに励む

(ホ) チュウショウ

18

① 契約をカイショウする
② カンショウ的な音楽が流れる
③ 他国とのセッショウに当たる
④ 被害をベンショウする
⑤ 計画がアンショウに乗り上げる

第2問　次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

ア　作家の川端康成は中学生のころ、祖父の介護をしていた。寝たきりの祖父との日々を書き留めたのが『十六歳の日記』である。学校から帰ると、寝返りをうつのを助け、しびん(注)をあて、茶を飲ませる。

川端は早くに両親を亡くし、祖父母に引き取られた。祖母も失った後、祖父の病を案じ(イ)ながら世話をするが、夜も起こされる生活は数え年で16の身にはつらかった。登校するとほっとしたようで「学校へ出た。学校は私の［　X　］である」と記した。

最近の言葉で言えば川端も「ヤングケアラー」だろう。(A)大人の代わりに介護や家事を担うヤングケアラーは、中高校生でおよそ20人に1人。国(ロ)による初の全国調査の結果に驚いた方も多いのではないか(ハ)。家族の世話に割く時間は1日平均4時間に及ぶ。

高齢化のほか共働きの増加なども背景にあるようで、きょうだいの世話をする子も多い(ニ)。学習が遅れ、進路が狭められるという悩みの一方、誰かに打ち明けられない実態がある。「相談しても状況が変わるとは思えない」などが理由だ。外からの助けがいる。

イ　カタカナ語の氾濫は歓迎するものではないが、言葉が与えられ、見えにくかった問題が浮き彫りになることがある。そうしてヘイトスピーチへの目は厳しくなり、就職氷河期世代への支援が必要とされた。若年介護に焦点をあてた手立ても急がれる。

子どもらしい生活が奪われる(ホ)。そのために夢をあきらめることもある。その子にとっても社会にとっても、あまりに大きな損失である。

（『朝日新聞』　二〇二一年四月一九日　「天声人語」による）

（注）　しびん　…　尿をためる容器。寝た姿勢での排尿の介助に用いる。

問1　破線部**ア**「作家の川端康成」とあるが、その小説作品として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 19 。

① 『こころ』
② 『羅生門』
③ 『破戒』
④ 『古都』
⑤ 『金閣寺』

問2　空欄 X に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 20 。

① 道場
② 楽園
③ 監獄
④ 職場
⑤ 戦場

問3 波線部(A)「大人の代わりに介護や家事を担うヤングケアラー」とあるが、本文の内容に即した説明として**適切ではないもの**を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **21** 。

① 中高校生のおよそ20人に1人が、本来は大人が行うべき介護や家事を担当している。

② 高齢化や共働きの増加により、親に代わって他の家族の世話をしている子も多い。

③ 家族の世話に時間を割かねばならないため学習時間が確保できず、進路が狭められやすい。

④ 「相談しても状況が変わるとは思えない」と考えるため、なかなか悩みを相談できない。

⑤ この概念が一般的になったことで、若年介護に焦点を当てた手立てが急速に進んだ。

問4　破線部**イ**「カタカナ語」の本文中における意味に近い語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 22 。

① 外来語
② 漢語
③ 固有語
④ 略語
⑤ 若者言葉

問5　本文中には「世話」という語が複数登場する。この語を用いた例文として**適切ではないもの**を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **23** 。

① そのような横やりは、大きなお世話だ。
② 最初からこの方法をとっていれば、解決に世話はなかった。
③ 現在の状況は行き詰まっていて、まったく世話が焼けない。
④ 心苦しいことではあるが、叔父に就職先を世話してもらった。
⑤ 以前の職場では、大変お世話になりました。

問6 本文の主旨として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は **24** 。

① 幼少時の苦労を糧として大作家となった川端康成の例を見ても、子どもが大人の代わりに介護や家事を担当するのは、必ずしも悪いことばかりではないかもしれない。

② 若年介護の増加は近年大きな社会問題となりつつあるが、子どもを含む当事者が打ち明けるのをためらいがちなせいもあり、さほど実態が知られていない。

③ 高齢化や共働きの増加などに加え、ゆとり教育の廃止によって生徒の学習内容が増えたことも、最近の子どもが時間に追われる理由のひとつである。

④ それまで明らかになっていなかった社会的課題でも、分かりやすい名前や概念を与えられることで、思いのほかスムーズな解決へと向かうことがある。

⑤ 「ヤングケアラー」の過重負担によって彼らの可能性が制限されているという問題は、各家庭で解決すべきケースとしてではなく、社会全体で取り組むべきテーマだ。

問7 二重傍線部(イ)〜(ホ)の品詞名を、後の①〜⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 25 〜 29 。

(イ) 病を案じながら 25

(ロ) 国による 26

(ハ) 多いのではないか 27

(ニ) 変わるとは思えない 28

(ホ) そのために夢をあきらめる 29

① 名詞　② 動詞　③ 形容詞　④ 連体詞

⑤ 副詞　⑥ 接続詞　⑦ 助詞　⑧ 助動詞

◆ 写 真 提 供 等 ◆

2023年度一般入学試験前期日程（２月２日）【国語】
『朝日新聞』2021年4月29日「天声人語」
朝日新聞社（承諾番号：23-1529）

※上記記事に関して朝日新聞社に無断で転載することを禁じます。